

基 調 講 演 II

「新聞記者⇔社会福祉士の視点から 『虫の目、鳥の目、魚の目』～福祉を複眼的に捉えるために～」

東京新聞特別報道部記者、社会福祉士・精神保健福祉士（本学通信教育科修了生）

木 原 育 子

皆様、こんにちは。東京新聞特別報道部で記者をしています木原と申します。本日はお足元の悪い中、来ていただいて本当にありがとうございます。新聞記者は、多くは「聞く側」にありまして、「話す側」にはあまり慣れておりませんので、お聞き苦しいところも多々あるかとは思いますが、後半に質問時間を多くとっていますので、そこでどんどん聞いていただけたらと思います。

挨拶でもありましたが、私はちょうど3、4年ほど前の2020年4月から21年9月、22年4月から12月にかけて、この学校の通信制の学生として学んでいました。当時はコロナ禍真っただ中で、マスクや体温測定が必須でして、一緒に学んだ友人たちともマスク越しで「目」しか出会っていないような状態でした。スクーリングも実習も、前日まで本当に実施出来るのか分からず、大変な綱渡りの時期もありましたが、とてもいい思い出です。そんな社会福祉士や精神保健福祉士の卵として、また新聞記者として福祉の現場を多く見聞きしたり取材したりしていますので、そこで感じた疑問や葛藤、ジレンマであるとかを、今日は皆さんと一緒に共有できたらと思っています。では、よろしくお願いいたします。

【1】自己紹介

今日は、大きく分けて、総論と各論という分け方で話をしていきます。まずは総論からお話させていただきます。

と、その前に、わたくしの自己紹介をさせていただきますね。私は、愛知県出身です。新聞記者という職業の人との最初の出会いです。高校時代に打ち込んでいた野球部のマネージャー時代にさかのぼります。愛知県は強豪校も多く、県立高校はなかなか甲子園への道は遠いのですが、それでも甲子園を本気で目指し、練習を重ねていました。3回戦まで勝ち進み甲子園強豪校に当たりましたが、手に汗握る展開で、互角に戦っていました。私はマネージャーでしたので、試合のスコアをつけることが最大の仕事なのに、応援に夢中で、気づいたら全くスコアをつけていない状態でした。スコアが真っ白だったんです。せっかく思い出の試合を全く記録できなかったということで、マネージャーとしては失格なのですが、ある新聞社の記者さんが、白いスコアの問題にしっかり気づいて、試合後、「どうしてスコアが白いのですか」と質問されました。一生懸命応援していたこと、3年間いろいろあったことを夢中で話しました。すると翌日、「真っ白なスコア」というタイトルで、大きく紙面を割く形で取り上げられていました。その時はとても嬉しくて感動して、言葉で誰かの苦勞に報いることができるという仕事は、とても素敵だと思いました。裏方など普段なかなかスポットライトが当たらないところにも目を向けられる大人ってかっこいいとも思いました。高校時代、そんな素敵なお大人になれたらと漠然と思った、それが私の新聞記者を生業にする人との最初

の出会いでした。

その後、大学に進学し、思いがけないことから NGO に関わることになりました。特に、ネパールの首都カトマンズから 25 キロほど離れたカカニ村には頻繁に通いました。その地域には当時、20 ～ 30 キロほど遠く離れた自宅から学校に通う子どもたちが多くいて、毎日学校に通えない子どもも珍しくありませんでした。そこで、図書館を作り、学校に行けない時は図書館で本を借りて自宅で学べる仕組みをカカニ村に導入しようと一生懸命でした。そもそも絵本もほぼない地域でしたので、日本の絵本を英語に訳して届けたり、司書の仕組みも取り入れられなかったかと模索しました。こういった活動が結果的に現在の社会福祉士や精神保健福祉士の原点につながるのかもしれませんが、そんな大学時代を過ごし、その後、就職活動のときに、NGO 活動と新聞記者は社会課題を解決する一端を担うという意味で、近いかもしれないと思い、新聞社の門を叩いた経緯があります。高校時代の良い思い出が背中を押した面ももちろんあります。

新聞社に入社し、8 年間ほどはいわゆる地方都市に赴任して、記者という仕事の基礎基本のようなものを学びました。振り出しは石川県の小松市という人口 10 万人ほどの町です。その後の滋賀県の大津支局では、いじめ防止対策推進法成立のきっかけになった大津いじめ事件の取材をしました。その後、浜松市にある東海本社で、戦争関係の取材を主にしていました。記憶に残る取材は多くありますが、ひとつだけあげるとすれば、「さまよう日章旗」取材班での取材でしょうか。今日はちょうど 6 月 23 日で、沖縄の慰霊の日でもあります。当時、日本は太平洋戦争に負け、アメリカ兵は、日本に勝った証として日本の国旗である日章旗などを戦利品として持ち帰っていました。現在アメリカにはそんな戦利品が大量に残っていることが判明しました。そして、その持ち主のわからない戦利品のひとつであった日章旗の持ち主を実際に探してみようという企画でした。日章旗に実際に寄せ書きを書いた人を一人ずつ探し

出していくという気の遠くなるような取材でした。奇跡的に持ち主にたどり着き、無事アメリカに渡った日章旗を持ち主に返すことができたという一連を連載シリーズで伝えました。新聞記事にはなりませんが、やはり子どもたちにこそ、この話を読んで欲しいと、新聞記事とは別に、「一郎くんの写真一日章旗の持ち主を探してー」というタイトルで絵本にしました。今も本屋や図書館にあると思います。

いろいろな街でさまざま学ばせてもらい、2015 年 8 月からは東京社会部で取材をしています。社会部では主に、東京都庁と警視庁の記者として長く取材をしてきました。都庁担当の時は、東京都の里親制度や、児童相談所の一時保護所の実態など児童養護を中心に取材しました。一時保護所への入所が長期化している実態など当時はまだ一般的にはあまり知られていなかったかと思いますが、そういった問題を繰り返し報じ続けたりしていました。その後、警視庁では、皆さんも覚えているかもしれませんが、目黒区で起きた結愛ちゃん虐待事件を取材しました。両親は逮捕されますが、家の中から結愛ちゃんが残した証拠品のノートが警視庁から公開されました。そこに書いてある言葉を全文新聞に載せましたが、全文載せた新聞社は恐らく東京新聞だけだと思います。「もうパパとママに言われなくても、しっかりと自分から、今日よりか、もっともっと明日はできるようにするから。もうお願い許して、許してください、お願いします。本当もう同じことはしません、許して」。これが文言です。虐待を受けた子どもが、もちろん、いろいろな経緯や状況があつてこの言葉が生まれているのですが、これはしっかり社会で共有する必要がある言葉だと直感的に感じ、締め切り間際でしたが、紙面を大胆に空けてもらい、大展開して虐待事件を報じていく「のろし」をあげました。大津のいじめ事件もそうでしたが、法律が変わるほどの事件の現場の熱量は肌感覚で全く違います。法律を生んだり変えたりすることはこういったことなのだと知っている記者の一人です。

警視庁でもう一つ、忘れられない座間事件も取材しました。「死にたい」「消えたい」とSNSでつぶやいた若い世代の女の子や男の子が、容疑者に誘われて家に行き、そのまま命を絶たれてしまう。本当にあってはならない事件でした。

その座間事件から1年の節目でつくったのがこの紙面です。新聞見開き全ページにわたってソフトなイラストで事件を表現しました。新聞では社会を揺るがす事件は、被害者の実名や顔写真を掲載しますが、遺族の方から「伝えないでほしい」と強い匿名の要望があり、私はあえてイラストで掲載しました。「消えたい」「死にたい」とつぶやくことは珍しいことではなくて、自分が生きている確認につながる行為だったのではないかと思います。人と人とのつながりの中で傷ついた心は、そのつながりの中でしか回復できない。小さなサインを受け止められる社会、ぬくもりのある社会を取り戻すにはどうしたらいいのだろうか。社会で考えていきませんかという呼びかけも込めて、このようなイラストにして表現させていただきました。この紙面を作っているときは、社会福祉士や精神保健福祉士になろうということは考えていませんでした。ただ、こういった紙面も、ケアの視点で伝えた事例の一つなのかもしれません。事件の痛みを社会で共有して、被害者や遺族の心を少しでも癒したいと願い、作った紙面でした。

【2】なぜ社会福祉士に・・・

その後、私は社会部から特別報道部に異動しました。特別報道部では、引き続き児童養護の分野や、司法福祉、精神医療、アイヌ民族など先住民族のこと、そして「支援が必要な人たち」の取材を続けています。

ここで少しだけ、今、私の中で揺れているモヤモヤしていることを皆さんに聞いてもらいたいと思います。スライドには「支援が必要な人たち」と書きましたが、これは、いわゆる障害者のことです。ただ私は最近、障害者という言葉にすごく違和感があります。障害者という言葉だけではな

く受刑者、出所者もそうです。「障害+者」「受刑+者」「出所+者」。「こと」と「人」を結びつけた言葉は、無意識に日常的にスティグマをつくりだしていないか。意図的ではなくても結果的に人間性を奪うことに加担しているのではないか。そのため、なるべく障害者という言葉を使わずに表現したいと最近強く思っています。公的文書の中では、障害の「害」の字を、ひらがなに変えています。そういったある種の小手先のことでなく、根本的にその言葉自体どうなのだろうか。突然変えるのは難しいと思いますが、別の言葉に言い換えることはできないのだろうかなどと、少しずつ意識することが出来たらと思っています。

本題に戻ります。レジュメにある「2人暮らし18年、父の死言えず」という記事。社会福祉士の国家資格をと思った理由は複数ありますが、大きなきっかけとしては今思えば、この記事がきっかけで社会福祉士になろうと背中を押してもらいました。その事件は、娘と父親の二人暮らしの家庭で起きました。ある時、高齢の父親が自宅で自然死し、ただ、なかなか父親の死を周囲に言うことできなかったというものでした。娘は父親の死を驚き、深い悲しみに浸り、また、葬儀代がかかるのではないかと心配し、警察に言えないまま時間だけが過ぎていったところ、警察に死体遺棄容疑、さらには、父親の年金をだまし取ろうとした詐欺の疑いもかけられて逮捕されてしまいました。結果的に不起訴処分で釈放され、女性が自宅に戻っていたので、なぜ父の死を言えなかったのかということを聞いてみたくなり、実際に会いにきました。当時、この女性は59歳でしたが、正直まるで少女と話しているようで非常に愕然としました。境界知能というか、犯罪者というよりは、支援が必要な女性だと直感しました。新聞記者は、すぐに「なぜ？」と聞きたがります。私も女性がなぜ助けを求めなかったのか？なぜ警察に言えなかったのか？と繰り返しました。するとその女性は子どものように泣き出してしまいました。何もすることができず、かける言葉もみつか

らず、ただ背中をゆっくりとさすりながら、この女性のような人たちを、「罪人（つみびと）」と言い切ることはできるのだろうか、とても衝撃的な体験でした。

一方で、福祉的な知識が全くない自分に悲しくもありましたし、支援が必要な人たちのことをもっと知りたい、もっと福祉のことを勉強したいと強烈に思いました。犯罪は悪いことですが、罪を犯してしまった人にとっては、おそらく、そのとき、その行動が最善とするところまで追い詰められてしまっている。その結果として、窃盗であったり、殺人であったり、傷害であったり、そういった行動を選ばざるを得ないところに追い込まれている。それが犯罪なんじゃないかと考えががらりと変わりました。犯罪を防ぐという真の意味は、犯罪と呼ばれる行動を選択しなくてもいいようにすること。私たち社会にできることは、犯罪をする選択肢を選び取る前に、福祉につなげること、つながることだと思いました。そのためには、もう少し社会を底上げしていく必要があるのではないか。私も含めて知識不足だったり経験不足だったり、圧倒的な現場力の不足を感じて、そういったことを少しでも解決すべく、まずは社会福祉士の資格を取ろうと思いました。

【3】なぜ精神保健福祉士に・・・

その後、私は精神保健福祉士の資格も取りました。なぜ、精神保健福祉士も取ろうと思ったのかは、やはり二つの資格がセットでないと、かみ合わないところがあるのではないかなと思うようになっていったからです。社会福祉士に関わる様々な現場の背景には、精神疾患や精神に関係する問題がたくさん横たわっていることは衝撃的でした。両方学んで初めて完結するのはないかとさえ思い、間髪入れずに精神保健福祉士になるべく、学び舎の門をたたきました。受験するには、資格を取るための実習が必須なのですが、私を受け入れていただいた精神科病院で、生まれて初めて閉鎖病棟を見る機会がありました。病院の柱には傷があり、よく見ると、「アホ」と「窒息」と

いう言葉が掘られていました。閉鎖病棟なので、鋭利なものは多分持ち込めないと思うのですが、自分の爪なのか、それともジャンパーのファスナーだったのか、どのようにして掘ったのかは不明ですが、これもまたとても衝撃でした。新聞記事にも書きましたが、やはり「知る」ということから全ては始まるのだと思うようになりました。

【4】二足のわらじ

そして、新聞記者と社会福祉士、精神保健福祉士の二足のわらじならぬ、ムカデのような生活が始まりました。ただ、こういったわらじの一つ一つのつながりは、一見全く違う分野に思いますが、つながっているところも多々あります。

例えば、新聞の場合、新聞倫理綱領があって、1946年の戦後すぐに制定され、2000年に新しい時代に合わせて再定義されました。少し読みますと、こうあります。「国民の『知る権利』は民主主義社会を支える普遍の原理です。この権利は、言論・表現の自由のもと、高い倫理意識を備え、あらゆる権力から独立したメディアが存在して初めて保障される。新聞はそれにもっともふさわしい担い手であり続けたい」と、書かれています。そして、「自由と責任」「正確と公正」「独立と寛容」「人権の尊重」「品格と節度」の5点について明確な目標設定が定められています。これを別の言葉で言い換えれば、具体的には、「知る権利への奉仕」「不正の追及」「公権力の監視」「歴史の記録」「社会の情報共有」が新聞社に求められているということかと思います。福祉の現場で一体何が起きているのかという知る権利に応えたり、事件や制度面から真実を掘り起こして、社会制度の不備や課題を問うたりすることも新聞記者には求められていて、その原理原則としてのよりどころとして新聞倫理綱領が定められているということです。

同じように、ソーシャルワーカーの現場にも綱領があります。1995年に社会福祉士の倫理綱領が採択され、2020年6月に新しくバージョンアップされました。そこには「人間の尊厳」「人権」「社会的正義」「集団的責任」「多様性の尊重」「全

人的存在」が柱に掲げられています。これらを言い換えると、ソーシャルワーカーの役割としては、権利侵害から当事者を守り、自己決定ができるように支援をしたり、社会環境の整備や当事者が強みを発揮していくために、社会課題を掘り起こして社会制度の不備や課題を変えるべくソーシャルアクションしたりすることが求められています。

この両者の綱領ですが、非常に似ていると思いませんか？例えば、どちらにも「人権」や「責任」という言葉が入っています。山の登り方は違いますが、結果的に行き着くところの頂上は一緒ではないか。響き合う点も似ている。新聞記者もソーシャルワーカーも、誰かの明日を変えるために動き、社会の媒介者として自分ではない誰かのために生きようとしていること。そして、いろいろな課題や問題を、社会の「共有財産」としてどう生かすのか考えているところ。新聞記者とソーシャルワーカーは、やり方は違いますが、重なるところが多くあるというのが、私が日々感じているところです。

【5】福祉の現場⇒新聞記者

一方で、もちろん違っている部分もあります。一つは、先ほども少し話しましたが、まずは質問の仕方が全く違います。新聞記者の現場では、「なぜできなかったのですか」「なぜそうしたのですか」などと、「WHY」を中心に質問して核心に迫っていく手法をとります。ですが、恐らくソーシャルワークの現場では、「WHY」といった質問の切り出し方はしないのではないのでしょうか。どちらかというと、質問は「HOW」が中心で、「あなたは どうしたいのですか」「今どう思っていますか」などと核心に迫っていく。この違いは非常に大きいのではないかと考えています。私たち新聞記者も「HOW」の視点が今、求められているのではないかと思います。また、新聞記者という職業はいろいろと物事を知っているように見えるかもしれませんが、意外と何にも知らないことも多く、福祉への圧倒的知識不足や無理解を備えてしまっている記者もいます。どの新聞社も記事の見

出しで、「弱者」という言葉を見かけます。その「弱者」というのは誰がつくり出しているのか。自分は「弱者」という立場にいないから、「弱者」という言葉が生まれる。自分の内なる偏見に気づかされることがあります。

【6】新聞記者⇒福祉の現場

逆に、新聞記者がソーシャルワーカーの現場に入ると、はて？とクエスチョンを投げかけてしまう場面も多くあります。例えば、非常に距離を感じることです。「個人情報の壁」を盾に、なかなか当事者の声を直接聞かせてもらえません。当事者が取材を受けても、ソーシャルワーカーから断られる場合も多くあります。「マスコミ」と、その4文字を聞いた時点でアレルギー反応を示すように、内容を聞かないまま反射神経的にお断りをされる方もいて、福祉現場とメディアの間で、コミュニケーション不全が起きているように思っています。

ただ、そういったコミュニケーション不全、マスコミ不信はソーシャルワーカーの人たちが悪いわけではなく、私たちメディア側の報じ方も反省しなければいけないと思います。例えば、「通院歴」という言葉ひとつとってもそうです。通院したことがある人が容疑者となった時、私たちメディアは、通院歴ありという言葉添えることがあります。最近では、京都アニメーション放火事件で、通院歴という言葉が東京新聞でも使いましたが、精神障害の団体から抗議の声が届きました。「精神疾患と事件性との関係に因果関係があるまでは報道しなくてもいいのではないか」「精神疾患を持っていたりその家族だったり関わっている人たちにとって、その言葉がどれだけ強いショックと衝撃とトラウマを与えているのか、記者自身、もう少し意識してください」などという注文もありました。

新聞記者とソーシャルワーカーは重なる部分もありますが、全く異なる部分も合わせもって、それらは二足のわらじだからこそ見えてきたことだと思っています。ソーシャルワーカー同士で事

例検討をする場合も、性別や状況を意図的に変えて情報共有すると思います。それは新聞記事では誤報にあたるため意図的には絶対にできません。そういったところも異なる部分の1つだったりします。

【7】複眼的な視点が必要に

そして、今ここに来てくださっている学生さんは習うかもしれませんが、ソーシャルワークのアプローチには、「ミクロ」と「メゾ」と「マクロ」という段階があります。ミクロは個人相談などにフォーカスしていくこと。メゾは地域など集団にフォーカスし、そしてマクロは政策提言や社会活動など、どちらかというと国や制度を焦点にしていきます。こういったミクロとメゾとマクロのアプローチを駆使しながら、支援困難なケースを可視化し解決していくことが必要になります。

ただ、これらは、新聞記者にも言えるのではないかと思います。新聞記者にも「虫の目」「魚の目」「鳥の目」という視点があります。これらをソーシャルワークの現場に当てはめると、「虫の目」はミクロの手法に相当し、魚群探知機のように現象を読む「魚の目」はメゾ、そして、俯瞰して客観的に伝える「鳥の目」はマクロの部分に当たるのではないかと思います。そして、もう少し踏み込んで話をすると、ソーシャルワーカーの人たちはこの「虫の目」の部分に当たる、ミクロな個別支援が得意な方が多い印象で、私たち新聞記者は政策提言につなげるような「鳥の目」が得意かと思っています。両者が補い合える結節点は、このメゾに相当する「魚の目」である地域活動かなと思っています。今後は、記者にもミクロな視点が、ソーシャルワーカーにもマクロな視点がより必要になってくると思います。

最近、物事を逆さまにして見てみる「こうもりの目」も必要かとは思っていますが、いずれにしても、総じて複眼的な視点が、新聞記者にもソーシャルワーカーにもより求められてくるかと思っています。ここまでが総論の部分になります。いかがだったでしょうか。

【8】精神医療と福祉

では、この後は各論に入ります。

私の本業は新聞記者ですが、社会福祉士と精神保健福祉士の資格を持つ専門職の立場から、東京新聞で「社会福祉士⇄新聞記者」という名の名物コラムコーナーを持たせていただいています。このコラムは、大きく4つ分野に分けて書いています。精神医療の分野、女性の権利を含めた児童養護の分野、司法福祉の分野、アイヌ民族など先住民族分野です。ここからはこのコラムを紹介しながら、これら4つの分野を各論という形で話していきます。

まずは精神医療についてです。精神保健福祉士を目指される方もお聞きくださっていると思いますが、精神医療は非常に閉鎖的な世界というのが印象で、なかなか真実が知られていない一面もあります。精神科病院の入院者は、2005年当時は35万人を超える人が入院していましたが、2017年は30万人と徐々に減ってはいますが、その動きは緩やかで高止まりしているのが実態です。また、この精神医療の現場では「特別」が多くあります。その中でも筆頭格として君臨するのが、精神科特例という制度です。医師や看護師数に対して何人の患者を対象とするかの比率が一般病床と比べてかなり特別な形になっています。一般病床は、医師1人に対して患者16人、看護師1人に対して患者3人を担当するのに対し、精神科病床の場合は、精神科医1人で48人の患者を担当します。単純計算で一般病床の3倍の患者の数です。この開きが意味するところは、そのぐらいの患者を入院させていても大丈夫ということ、国からお墨付きを得ているということです。本当にしっかりとケアができているのか。医療者の目が行き届いているのか。これが精神科病院は「収容ビジネス」だ、と指摘される所以で、精神障害者、精神の病気を抱えている人への人権軽視や差別につながっていると言われています。医師や看護師の数が圧倒的に足りないため、安易な身体拘束や隔離も法的な拘束力をもって結びついてしまう構造的な問題が横たわっている。身体拘束の件数も

増え続けているのが現状です。また、通信の自由が無く、携帯電話が一律で全面禁止の病院が少なからずあります。携帯電話を持てないと、病院で虐待が起きていても外部にSOSを発信することもできない。人権上に問題があることが起きても訴えられる手段がない。意図的に閉鎖的な世界にしているのではないかと思わざるを得ません。精神疾患や精神医療の記事を書いていると、東京新聞は、記事の末尾に「木原育子」と署名を載せますので、精神科病院からものすごい量の手紙が届きます。携帯が持てないため、虐待が起きていることを訴える番号さえわからない。毎日のように不当な身体拘束や虐待の訴えがあり、いつもひりひりした思いを抱えています。

精神科病院の中だけではありません。精神障害の人たちに対する社会からのスティグマ、内なる偏見を解消するためにはどうしたらいいのか。その糸口を探るため、自分が福祉側の現場に入ることでも分かることもあるのではないかと思います、週末限定ですが、地域活動支援センターでボランティアをしています。その地域活動センターでボランティアをしていることが、あるテレビ番組の特集で取り上げられたので、その動画を見ながら考えていきたいと思っています。

(映像)

ありがとうございます。知らないことは偏見を生みやすい土壌を作ります。支援が必要な人たちを社会の異物のようなものにさせないためにも、みんなの輪の中に飛び込んでいくことが必要だと常々思っています。彼ら彼女らが社会で普通に生きていることは極めて当たり前で、手を取り合うことが求められています。映像の冒頭に出てきた彼女とはとても仲良しで、「木原さんが出演するなら私もモザイクをつけないで欲しい」と、普通に顔出しオッケーで出てくれました。毎週末に通っているの、だんだん信頼関係も芽生えてきて、呼吸が合ってくる瞬間があります。受け答えのポンポンというキャッチボールが少し苦手な

人や、会話のテンポが違う人もいますが、テンポが合ってくる感覚がすごく楽しくて、私がみんなに会いたくて通っています。

また、最近では東京新聞のコラム企画「社会福祉士⇄新聞記者」の中で、「幻聴日記」というタイトルの連載記事を書きました。体調などによって、「わー」とか、「あー」とか叫んだり、「幻聴さん」と会話したり、街中や電車の中で、一度や二度そういった場面があると思います。「幻聴日記」と書かれた大学ノートには、自分の頭の中で今、起きている会話が全てノートに書き出されていました。その方は亡くなってしまいましたが、ご家族から「偏見を取り除くためにも是非知ってもらいたい。伝えて欲しい」とお話を受け、残された42冊の大学ノートの中から社会で共有できるだろう言葉を選び出して、5回シリーズで伝えた企画でした。私は、「幻聴日記」を読むのに半年以上かかりましたが、家族会等からも非常に反響もあり、多くの読者からも「納得」の声が届き、本当伝えてよかったと思いました。私自身「幻聴日記」を読む中で感じたことは、「わー」「あー」と叫ぶことも何かのつながりの中で生きようとするありのままの瞬間ではないか思ったことです。人間はつながりの中で生きていくものです。そういった原始的なことをしているだけに過ぎないのではないかというのが私が感じたことでした。

そして、一つ伝えておかなければならないのが、私の名前を多くの方に知ってもらったのが、日本精神科病院協会の山崎学会長へのインタビューだったかと思います。とてつもなく反響が大きかった記事でした。山崎会長のお立場は、日本の精神科病院の中でもトップ of the トップの方です。しかし、精神科病院を退院させ、地域で暮らしていくことに対して非常に否定的な考えを持っている方でもあります。「地域で見守るなんて出来るのか」「心が痛むだとかきれいごとを言っているんじゃない」などと辛辣でしたが、私は一歩も引きませんでした。新聞のインタビュー記事は、少しビビッとな表現や差し障りがある言葉、例えば「は？」という声などは極力カットして、

すらすらと読みやすくして読者に届けます。でも、私はあえてそのまま伝えた方が山崎会長の考えが伝わるのではないだろうかと、読者の方からお叱りを受けるかもしれないと想定しつつ、そのまま活字にしました。考える材料を届けるのは私の仕事ですが、考えたり答えを出したりするのは読者のものだと思います、バトンを託すような気持ちで、ありのままを伝えました。すると、SNSを中心に、「山崎会長の言っていることはその通りだ」という人、「けしからん」という人、インタビュー記事から議論が巻き起こりました。社会の本音をあぶり出すことができた、精神医療と社会についての現在地を描けたと思っています。その上で、「山崎会長の言っていることはその通りだ」とおっしゃっている収容ビジネス肯定派の人たちにこそどうしたらわかってもらえるか、考えてもらえるか、それが私の今後の目標になっていくのかなと思っています。目標というか、私の課題と言い換えられるかもしれません。それが今回の各論編の一つ目、「精神医療」についてのお話になります。山崎会長のインタビュー記事は、巻末に載せたので講演が終わった後に読んでいただければと思います。

【9】「夜の街」の福祉

そして、2つ目の柱、「夜の街」の福祉や児童養護についての話に入ります。かつて記者としてもソーシャルワーカーとしても非常に印象的な虐待事件取材しました。お母さんが子どもを置いて旅行に行ってしまう、その間に幼い子どもが亡くなってしまったという事件でした。言葉だけを聞いたら、母親に対して「どうして？」と疑問が浮かぶでしょう。案の定、「子どもを置いて男と遊んでいたなんて」という声がSNS等で飛び交いました。生身の事件なので、「事例」とは言いたくないのですが、どうして福祉につながれなかったのか、少し振り返りたいと思います。

子どもの名前はノンちゃん。お母さんは、結婚していた時期もありますが、ノンちゃんのお父さんとは離婚し、お母さんとノンちゃんの2人で

生活をしていました。ただ、このお母さんも非常に複雑な家庭で育ってしまっていた。自分も幼い時に両親から壮絶な虐待を受けて育ち、このお母さんの両親、つまりノンちゃんにとっては祖父母に当たる両親も虐待事件で逮捕されていて、ノンちゃんのお母さんは児童養護施設で育ちました。そのため、子どもの育て方が全く分からなかったという背景がありました。3歳児健診などを受けなければいけないことも分からない。離婚して受け取れる児童扶養手当の存在も知らず、行政とのつながりも薄く、受け取ったのは離婚から9か月たった後でした。なかなか社会資源にたどり着けず、手助けしてくれる人もおらず、その間にノンちゃんの叫びに誰も気づけなかった、そんな事件でした。私は裁判を何度も傍聴しましたが、お母さんは、両親からの「虐待の支配」から、まだ抜け出せていないことが非常によく分かる裁判でした。自己肯定感が低く、生きていくのがやっとだと思わざるを得ない。彼女は裁判で切々と自分の思いを語りかけるのですが、そこまで語りかけることができるようになったのは、弁護士とは別に社会福祉士の存在があったから。司法福祉のソーシャルワーカーが裁判前に28回面会し、被告の心、ノンちゃんのお母さんの心を非常に良い形で解きほぐしていった。なので、裁判では自身の本当の気持ちを裁判官や裁判員に伝えることができるようになっていました。そういった経過を新聞記事で詳報しました。ノンちゃんに二重にオムツを履かせてお菓子と水を大量に置いて、自分は旅行に行ってしまうのですが、このお母さんが裁判で何と言ったかということ、「私は子どもの頃、なんとか自力でお風呂の水を飲むくらいだったので、それは嫌で自力で食べて欲しいという思いがあって、お菓子と水をいっぱい置きました」。そして「うちが我慢していれば、一人で頑張っていれば、我慢の限界をどんどん超えていたことも、過去に縛られていたことも全部間違っていた。私は、この橋本さんという社会福祉士の方と出会っていなかったら、この公判でも自分が悪いとしか言えなかったと思います。ノンちゃんにしたことに対し

て、償うために何をしたらいいのか、何をすべきなのかちゃんと考えて、ノンちゃんを思って、そして、償うためにも自分が変わりたい」。裁判の中で切々と語りかけました。この橋本さんという社会福祉士がどうやってノンちゃんのお母さんの心を解きほぐし、「虐待の支配」から抜け出させていったかという、「何度も語りかけた言葉がある」と言っていました。それは「あなたは生きて幸せになっていい」という言葉。「今、死んだら苦しみから逃げているだけ。死んでしまったら、ノンちゃんを思うこともできないんだよ。生きて幸せになっていいんだよ」。ずっと呪文のように語り続けたそうです。ノンちゃんのお母さんは今、服役しています。社会福祉士の仕事は、さまざまな福祉の現場があり、いろいろな人の人生に関わることができる仕事だと改めて気づかされました。この事件だけではなく、日々いろいろな虐待事件が起きると、警察から容疑者の名前が発表されます。中には、きっと「罪人（つみびと）」というよりは、「福祉につながらなければならなかった人」もいるだろうと想像がつくのですが、新聞記事としてどうしても容疑者の名前を伝えなければならない時があり、やはり贖罪の思いがあります。どこで服役しているのかが分かれば、必ず手紙を書くようにしています。恨まれる覚悟で、ただ逮捕されたことだけを報じるのではなくて、その後も継続して関わり合えるようにしていつか、初めて事件記者といえる存在になれるのではないかと考えています。

また、児童養護分野を追究していくと、「女性の権利」や「夜の街の福祉」と切り離せない面もあります。もう一つ紹介したい記事があります。たくさん報道されているので、皆さんもよくご存じだと思いますが、トー横という歌舞伎町の一角付近で、待ち合わせに見せかけてずっと立って何かを待っている女性たちが集まっているスポットがあります。いわゆる売春行為の相手を待っているということです。あまりお勧めしないし、真似はしない方がいいのですが、同じ場所に立って見ないと当事者の人たちに話が聞けないと思い、幸

い私は女性なので、一緒に立ってみました。「私は新聞記者です」と先に身分を明かして、お互いに身の上話をしながら、どんな思いで立っているかを聞かせてもらいました。そうして書いた記事が、「届かぬ夜の街の福祉」というタイトルのこの記事です。彼女は子どもがいるので、その養育費を稼ぐために、相手を待っていると話してくれました。「無心で立っているだけで何もしていないのに涙が勝手に出てくる」。そんな胸の内を語ってくれたことは、私にとっても強い衝撃を与えました。彼女たちは、本当は何を待っているのだろうか。非常に考えさせられました。女性たちは福祉につながりにくい場所で生き、大人たちに裏切られた経験を多く持っていたりします。「支えたい」「つながりたい」とこちら側が思っても拒絶反応がとても多いです。今まであまりにも傷つけられ、裏切られてきたので誰も人を信用できなくなっているのだと思います。

そして、この「夜の街の福祉」のことを考えていく際、必ずぶち当たることがあります。「女性の権利」です。具体的な法律の名前でいうと、売春防止法です。最近、警察がその一角で立っている女性たちを大量に検挙する事案が相次いでいますが、その根拠となっているのが売春防止法という法律です。まずは法律上の売春の定義ですが、売春とは、売春防止法第2条で、「対償を受け、又は受ける約束で、不特定の相手方と性交することをいう」と定義しています。つまり、「対償を受け、又は受ける約束で」というのが1つ目、「不特定の相手方」というのが2つ目、「性交する」が目です。この3点セットが揃うと、法律上で初めて「売春」と認定されることになります。そして、売春防止法第3条では、「何人も、売春をし、又またその相手方となってはならない」と明確に売春の禁止をうたっています。ただ、刑事処分については、勧誘した側だけの処分を書いています。つまり、買った側は罪に問われない立て付けで、買った側が処罰されないことが保障されているのがこの売春防止法です。売春防止法は同様の趣旨の法律が各国にありましたが、1990年代頃にス

ウェーデンで、買った側が処罰されて、売った側は福祉につなげるという法律ができ、この北欧方式は今では世界の常識になっています。あのイスラエルでさえも、買った側が裁かれるという法律がありますし、韓国でもその法律ができています。言い過ぎかも知れませんが、売春防止法は「法の下での平等」に反しているのではないかと、売春防止法そのものが憲法違反なのではないかと思ってしまいます。女性の福祉の現場を考える際、こういった事実が横たわっていることも皆さんに知っていただけたらと思います。

【10】司法福祉とわたし

そして、柱の3つ目、司法福祉を駆け足でお伝えしようと思います。個人的には、この司法福祉に関しては地道な活動を続けています。例えば、50代の受刑者の方と長く文通をしています。その方は、1990年代から、窃盗罪で6度も刑務所を出入りしている「自称ベテランさん」です。いつも「もうしない」と誓って社会に出るのですが、やはり戻ってきてしまう。先月もまた同じことを繰り返してしまい、「ごめんなさい、またやってしまいました」というような手紙が届きました。私も少し落ち込んでしまい、どう返信を書こうか考えあぐねていました。その手紙を何度も読み返しているうちに、偶然少しライトに透かしてみえて、すると「仮出所を狙ってみようと思います」と書かれた部分が、ものすごい手紙の消しあとがあることに気づきました。この仮出所を狙ってみよう、というのはどういうことかという、再入率の数字が全然違います。仮釈放（仮出所）で出所すると、さまざまな福祉制度などにつながれた状態で刑務所を出るので、再犯する可能性が27.7%と数字としては低い。しかし、満期で刑を終えて、何の福祉制度や保護制度にもつながらずに出所すると、仕事の面や住む場所などを含めていろいろリスクが出て、44.8%に跳ね上がる。なので、仮釈放で出たほうが再犯するリスクが下がるということです。その仮出所を狙ってみよう、と彼は思いきって言ってくれたのだと気づ

くことができ、返信の手紙には「言いにくいことを言うてくださってありがとう、手紙をくれてありがとう」というと書き出しで送りました。

もう一つはこの国では、無期懲役判決を受けて長い期間服役し、諸条件が重なると、仮出所できる立て付けです。もちろん仮出所しても、あくまで仮出所なので選挙権が復活することもないし、移動などの制限もかかりますが、刑務所からは出ることができます。ただ、無期懲役判決者の中で仮出所できたのは、10年間で104人、率に換算すると1%にも満たない、0.3%ほどの確率でしか仮出所できない状態です。そして、刑務所内では懲役の年数が長い人がいじめられるという懲役格差や、仮出所後も職業をつくことが難しいなど、根強い偏見と差別が横たわっています。受刑者をどう社会で受け入れていくのか、受け入れていくために社会ができることは本当に何か、社会で考えていかなければならない。そんな話を背景に、実際に無期懲役判決から仮出所してきた人の話を、この秋に書籍化して出版することになりました。タイトルを「服罪、無期懲判決を受けたある男の記録」（論創社）です。

障害者という言葉や受刑者という言葉も「障害」+人、「受刑」+人で差別的だと前半でお伝えしましたが、この矯正という言葉も考えてなければいけないと思います。刑務所を管轄するのは法務省矯正局で、司法福祉に関わっていると、よくこの矯正という言葉に出会います。ただ、矯正というと、その人自身の人間性に対しても矯正していくという意味合いがどうしても含まれます。この言葉を使うことで、「矯正すべき人間性」という無意識の線引きや差別を生んでいるのではないかとと思っています。

そういった差別的な芽を極力取り除こうとしている国があります。イタリアです。イタリアでは、受刑者のうちから企業と雇用契約を結んで労働に参加しています。出所後にそのままその企業の従業員として働くことも多いとききます。日本も出所者を優先的に雇用する協力雇用主制度はありますが、多くが建設会社などに頼っているのが

現状で、三つ星の有名なレストランや大企業などが協力するという文化はあまりありません。「罪」と「人」というところを明確に分けている、それがイタリアという国です。イタリアは精神科病院をなくした国でも有名です。イタリアも最初から福祉国家だったわけではなく、北欧から学びながら、自分の国に合うスタイルで改善を重ねていったということです。次は日本の番だと思っていますが、どうでしょうか。

【11】アイヌ民族と福祉

そして、最後にアイヌ民族のことについても日々紙面で伝えていきますので、少しでもお話しさせていただきます。習った方もいると思いますが、ソーシャルワーク専門職のグローバル定義には倫理綱領があります。その中では、「ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学および地域民族、固有の地を基盤としてソーシャルワークは生活課題に取り組み、Well-beingを高めるように人や様々な構造に働きかける」と定義しています。定義の中に、なぜ「地域民族、固有の地を基盤として」という言葉が入ったのかというと、これは明確に西洋の民主主義、植民地主義の反省に基づいている、と言われています。これらは、人ごとではなく、日本でもアイヌ民族の権利を奪い同化させていった負の近代史があります。不平等な法律を作ったサケを取れないようにしたり、アイヌの土地を官有地にしてアイヌ民族に対して強制移住が行われました。アイヌ民族を伝えることは、私たち和人（アイヌ民族からみて、アイヌ民族ではない日本人を意味する言葉）側にとって、自分たちの加害の歴史と向き合うことと同義ですが、綱領に盛り込まれているからという理由だけでなく、社会福祉の立場から、この問題に深く関わる必要があると思っています。アイヌ民族への差別も深刻です。明治時代の過去の話ではなく、今もアイヌ民族の人たちは、非常に苦しい立場に置かれています。アイヌ民族の人たち対象の調査では、「差別がある」と答えたのが72%に対し、国民を対象にした調査では、「差別がある」と答えたのは17%し

かない。この数字の落差を問い続けなければならないと思います。問われているのは和人側、私たち側だということだからです。ソーシャルワーカーとしても、アイヌ民族の自己決定権を保障するために何ができるのか考え続けていこうと思っています。

【12】社会への提言

さて、これまで「精神医療」「児童養護」「司法福祉」そして「アイヌ民族」と4つの柱を柱に、各論として皆さんに伝えてきました。では、これからどうしていくのかという部分で、第3部に入っていきます。

結論から言えば、私は、これからも制度面においてもまたソフト面においても、ソーシャルアクションを続けていこうと思っています。

制度面については、少し前に報じた話ですが、児童虐待相談対応件数が児童虐待の指標として長くさまざまな施策のベースにあった数字かと思いますが、その件数は実は、一度も下がったことはありません。調査報道の中では、児童虐待相談対応件数は、全国的に統計の取り方の定義が違ということが分かってきました。今、全国調査をかけて洗い直しをしている途中なので、近いうちに本当の数字が何だったのか、続報があると思います。基盤となる数字データがないと、確実な施策は打てないと思っています。この児童虐待相談対応件数は、児童福祉司を何人配置するかの基準になります。自治体としては、児童福祉司を少しでも多く欲しいという思いから、水増ししがちなことも分かってきました。自治体で物差しがバラバラで、実は正確な児童虐待相談対応件数をだれも知らないという事態はゆゆしきことだと、問題提起をさせていただきました。

もう一つは、日本精神保健福祉士協会のメディア連携委員会に属していただき、委員の一人として「取材を受ける手引き」の作成に関わることができました。精神医療や福祉の現場は、マスコミからの取材に対して非常にハードルが高い現場になっています。なかなか取材を受けてもらえませ

ん。もちろん全てオープンにというわけにはいかないかもしれませんが、やはり、それぞれの課題を社会の課題に変えていくことは必要なことだと思っています。その最前線にいるのがソーシャルワーカーで、ソーシャルワーカーの存在意義のひとつでもあると思っています。とはいっても、確かに新聞記者の中にはさまざまな記者が正直います。ですので、良い記者の見分け方や取材の断り方、受け方などなど、かなりリアルな内容になっていますので、公開されたら是非、目を通してほしいと思っています。この手引きでノウハウを学んで、メディア側の力学や考え方も少し知っていただき、オープンにできるところはしていく。社会を循環させることは良い効果も生むと思っています。

また、ソフト面に関しては、私は趣味が高じてヨガのインストラクターの資格も持っているので、ヨガを学びたい受刑者に手紙でヨガを届ける団体「プリズンヨガサポートセンター」のメンバーに属しながら、刑務所の中の環境改善につなげています。また、精神障害を抱えている人たちで、制度や支援にまだつながっていない人たちと関わり合うアウトリーチの一環で「ふらっとヨガ」も企画し、楽しみながら社会の底上げ活動をしています。そして、児童養護施設の職員の人たちでつくる「子ども研究会」にも所属しながら、事例検討や講演会を企画し、知識を深めています。

【13】まとめ

そんな風に、これからも、福祉を複眼的な視点で捉えていくために、「つなげる」「伝える」「創る」という、3つの「つ」を意識しながら、社会のミツバチのように、いろいろなところに飛んで行き、つながりあう仕組み作りをこれから続けていけきたいと思っています。ここまで聞いていただいて本当にありがとうございました。発表は以上になります。

菱沼 木原さん、ありがとうございました。それでは、是非、今日ご参加の方々の質疑応答をした

いと思います。ご感想、ご質問ある方、挙手いただければと思います。それではお名前をいただいってから、ご発言をお願いします。

質問者A 今日は貴重なお話、どうもありがとうございました。2つ程、質問があります。1つ目の質問は最後、日本精神保健福祉士協会さんの方で「取材を受ける手引き」に取り組まれていることですが、もう少し一般的に取材を受けるだけではなくて、ソーシャルアクションの中で、メディアを上手にソーシャルワーカーが使うような、例えば、プレスリリースだったりとか、記者会見だったりとか、そのあたりのご助言があれば、非常に今後の実践に向けて役に立つと思います。そして、2つ目ですが、これは少し私の個人の研究に関わりまして、私もアイヌ民族に関するソーシャルワークについて、論文や教科書でいくつか書かせていただいております。冒頭で沖縄問題についても研究や取材をされているということで、アイヌ民族のように残念ながら、国会決議が出ていないこともあり、日本国内においての沖縄の人々、琉球民族の立ち位置と先住民族、先住性をどうお考えになっているのか、この2点について教えていただければと思います。よろしくお願いします。

木原 すばらしい質問、ありがとうございます。

まず、福祉側からのソーシャルアクションですが、大きな団体ではプレスリリースだったり、何か節目のニュースの際に声明を出すなどだったりではありますが、ほとんど福祉側からの働きかけは実は非常に少ないと思っています。手引きに関しては、あくまで取材の受け方に限定して作っていますが、福祉側からの働きかけは必要だと思います。まずは取材を受けていき、個人的に記者とのつながりというか、メディア側とのパイプを持ってそこから広げていくというやり方もあるかもしれませんが、もちろん、記者会見なども積極的に開いていただけたらと思っています。そういった日頃からの社会的発信が福祉の存在感にもつながります。

また、2つ目の質問で、沖縄の琉球民族やアイヌ民族のようなマイノリティライツに対して、日本の教育現場ではほとんど教えていません。私も社会人になってから取材しながら学んでいました。日本には60年代、70年代の学生運動の影響もあって、高校生が政治活動に参加することを禁じる1969年の通達などが長く横たわり、教育現場で政治的な主張をしてはいけない、ディスカッションはできないなどの教育的環境が敷かれてきました。議論しないことが、無関心の土壌を生み、人権とは一体何なのか、そういった根本的な議論もできず、問題や課題を皆で共有することもできない。そのため、琉球民族のことやアイヌ民族のことにに関して多くは何が問題なのかとも正直わからない。ですので、先住民族をテーマにして記事を伝えるときはいつも言葉を丁寧に補い、伝える努力をしています。それが今の日本の現状だと思います。

そんな中で、例えば遺骨の返還運動についてもやはりアイヌ民族が先行している感じがあって、琉球民族はその後を追従しているという形になっているのかもしれません。それはやはり、琉球民族は琉球王朝が崩壊して以降、必死に日本人になろうとしたという時代背景が影響しているのかもしれません。例えば、明治36年の1903年に大阪で国内初の万博が開かれましたが、そこで「人類館事件」が起きました。アイヌ民族や琉球民族を生身の形で展示するという非常に差別的な事件です。その際、琉球民族が抗議したのは、展示そのものではなく、「なぜ琉球民族がアイヌ民族と同じように並べられるのだ」という視点でした。差別に差別をつくるというか、琉球民族の尊厳というよりも、懸命にヤマトンチュウに並ぼう、ヤマトンチュウになろうとした。それがアイヌ民族と同じ扱いにされたので烈火のごとく怒ったのですが、それに比べてアイヌ民族は、和人とは一線を画すことが多かった。そういったところからも、両者のこれまでの歴史的な位置づけは大きく違っていると思います。ですので、先住権に関する裁判も遺骨返還訴訟もアイヌ民族が先行する形

になっているのかもしれませんが。

菱沼 よろしいでしょうか。ありがとうございます。その他の方々いかがでしょうか。

質問者B 貴重なお話、どうもありがとうございました。お話を伺っていて、新聞記者の方も私たちも、ソーシャルワークの世界にも、言葉や思いを代弁していくところは本当に共通だという思いで聞かせていただきました。お話を聞いている中で、私の中では、相談援助の場面でありのままを受け止めようとしつつも、自分自身、会話を意図的に操作して言っていた。そんな思いも少し巡りながら、先ほどお話の中で、インタビュー記事を読みやすく伝えるというお話もありました。ありのままを伝えないといけない。一方で、恐らく新聞の世界でも、いろいろなルールや社内のやり取りがある中で、ありのままに伝えられない葛藤や、どこまで本当のことを伝えていくべきか。そうした悩みはどのようにお考えになり、記事を書かれているのかをお聞きしたいと思います。

木原 いい質問をありがとうございます。葛藤やジレンマはもう毎日です。そして、伝えきれないことの方が多いと思います。というのも、今、新聞社は過渡期といったところで、紙ベースで伝えるニュースと、速報性が求められるインターネットで伝えるニュースと模索が続いています。紙のニュースとネットのニュースは、書き方も違いますし、ネットのニュースの影響力は、自分が意図していない形で大きくなることがあります。より専門性が問われる面もあります。緊張感の質も違うかもしれません。

例えば、夜の街やトー横にいる当事者の人たちの取材に関しては、取材を受けてくれた当事者の方が実名で記事にしたいと承諾してくれても、影響を考えて、個別にケースバイケースでの判断で伝えることなどはよくあります。ちょっとうまく答えられなくて、すみません。意図的に発言を操作することはありませんが、どこまで公開

するかなど正解のない世界との葛藤も抱えながら描いているというところはどの記者にもあるかと思っています。

菱沼 ありがとうございます。そのほかの方々はいかがでしょうか。では、先に後ろの方お願いします。

質問者C 木原さんの複眼的なソーシャルワークの視点ということで、非常に興味を持って聞いていました。私自身は、まだ学部で1年間学んだだけで、ソーシャルワークの複合的なところを理解するにはまだまだ途上なところだと思いますが、ソーシャルワーク側の人たちにとっても、まだまだ課題が残ると思うのです。だから、ソーシャルワーク側の人たちが、複眼的な目線で取り組めるのには、どのような課題を取り組んで欲しいとか、少し難しい質問だったら申し訳ないのですがお話しいただければと思います。

木原 ありがとうございます。講演の中でもありましたが、ソーシャルワーカーの人たちは、「虫の目」ミクロの視点で捉える時、大変緻密で、丁寧にケアしながらアプローチしていて非常に尊敬する部分があります。ただ、どちらかかと言うと「虫の目」のまま内へ内へとももという傾向があるのではないかと思います。「鳥の目」の部分信じて、外に向かって自分たちが発信していく。もう少し社会の方にベクトルを変えて発信するとさまざまなところで、課題解決の近道になるのではないかと考えています。

逆に新聞記者はミクロな視点が実は少し弱いのかかもしれません。もちろん時間的な制約やさまざまな力学でしかくてもできない面もあります。印象的な話があります。これは社会福祉士になる前の話ですが、「貧困」をテーマに記事を書かなければならなくなり、私は恥ずかしながら、経済的に支援が必要な人たちのところに食材を届けている「フードバンク」の事業所へ行き、苦しい立場の人を紹介してくださいという主旨のお願いを

しました。その時、リーダー的な方に言われたのが、「紹介するのはいつでもできるけど、あなたもやってみたらどうですか」と。会社の許可を得て、1週間フードバンクを手伝いました。手伝いながら当事者の人たちと話をしながら、取材に結びつけていきました。誰かを紹介されて書く記事と、自らその人たちの輪の中に入っていったつながりながら書いた記事は一見同じように見えても、記事の奥行きみたいなものが全然違います。現場に入っていくって書くということは、言わずもがな記者の基本。なお一層、そういった一面も大事にしなければいけないと思います。

菱沼 ありがとうございます。では、もう1人の方、お願いします。

質問者D 貴重なご意見ありがとうございます。普段は、強度行動障害者の方のグループホームをやらせていただいています。中日新聞さんや東京新聞さんは、今、「恵」の問題で、非常にフォーカスされているかと思います。本当に、1週間、1週間、毎週新しい情報が出てきていて、私たちの業界でも非常に注視しているニュースです。とても危惧していることがありまして、今回、名古屋のほうで、いわゆるグループホームが一斉に指定取消がおきました。全国的には、連座制という形で、このまま全国的な問題で大きく広がっていくのか、当事者の方やご家族、事業者からも心配の声が上がっています。私たちの友人はグループホームを利用している。非常にこの問題がフォーカスされた中で、問題性はもちろん高い。ただ報道する側として、やはり入所施設は必要だよねとか、いわゆる居住の問題を考えたときに、施設の必要論が一方で盛り上がってしまう。入所施設で住むべきだとそんな形で伝わっていく内容が一部あります。それは読者側の問題でもあります。趣旨がそこになかったけれども、逆に広がってしまったときに、修正はないし、伝えていない本質を再度伝えるのは本当に難しい。だから新聞記者として、本質を伝えていくときに大事にしている

ものをお聞かせいただけたらと思います。

木原 ありがとうございます。そうですね、本質を伝えるために大事にしているものということですが、逆にいうと、自分ではそういうつもりではないのに、自分の記事があらぬ方向に解釈されて転がってってしまう時の一つのセオリーは、簡単にいうと、取材不足だったりします。分かっているまま書くと大概、変な方向に記事が転がりがちです。自分自身もそういった経験がなきにしもあらずのため自戒を込めて今話しています。例えば、取材をする前から自分の中で何かを結論づけて、その証拠集めみたいな形で記事を書いていくと、だいたいあらぬ方向に転がります。取材を尽くしたとは言えないからです。さまざまに取材を尽くして、そこから導き出して真実を伝えていくという形だと、そういった間違いは起きませんし、本質を伝えられているのだと思います。最初から新聞の見出しを付けて、取材にかからない、と言い換えられるのかもしれない。

「恵」の問題に関して、今の施設の問題だけのことを近視眼的に書くだけではなくて、少し引いた視点で描いていたり、逆の立場というか逆さまに見てみたり、歴史的に捉えて描くことも本質にたどり着く上では必須条件になるのだと思います。なぜ施設ができたのか、そこにどんな法律や制度ができていって、そして消えていったのかとか、裾野を広げて描いていく。本質を伝えるというのは、結局そういうことなのかなと思います。急に箱の中に手を突っ込んで握っても、それが本物、本質かはわからない。箱の中も箱の外もがさがさと探したりして、本質をつかんでいく。記者17年している私でも本当にそういったことがで

きているのか、明日からもう少し自分を見つめ直しながら頑張ろうかと思いました。ありがとうございます。

菱沼 ありがとうございます。他にもお伺いしたい方、いらっしゃると思いますが、ここでいったん閉めたいと思います。今回、どうしてこの本部企画を考えたかという、まずは卒業生、修了生で活躍している方にお話していただきたいということ、いろんな方々が出てくる中で、木原さんは新聞記者という立場の中で国家資格をお取りして、また精力的に社会問題を取り上げて記事を書いている方なので、お願いをして来ていただきました。今日は、学生の方々、一般の方、聞いていただいていると思いますけれども、多くのことを感じられていると思います。普段私たちは、新聞を目にしますが、事象だけ目がいきがちなところを、新聞記者の方が、背景や当事者の方に迫っている。またそこでソーシャルアクションを考えて、一つ一つの記事を大事につくっていらっしゃる。いろいろ学ばせていただいたなと思います。また、私たちも一人でソーシャルアクションをするのは難しい中で、いかにメディアの方々とつながっていくのか、また、職能団体としてつながっていくのか、そんなことも考えさせられたご講演だったと思います。ご質問ある方がいらっしゃると思うのですが、一旦ここで閉じさせていただきたいと思います。木原さんに大きな拍手をお願いします。ありがとうございます。オンラインで参加の方が、途中不具合があり申し訳ありませんでした。それでは、以上をもちまして、午前の部の基調講演を終わりにしたいと思います。